

Title	書評: 草柳千早著 『「曖昧な生きづらさ」と社会: クレイム申し立ての社会学』 世界思想社、2004年
Sub Title	
Author	小倉, 康嗣(Ogura, Yasutsugu)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2005
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.10 (2005. ) ,p.158- 163
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 訂正あり
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20050000-0158">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20050000-0158</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

---

書評：草柳 千早著

『「曖昧な生きづらさ」と社会——クレイム申し立ての社会学』

世界思想社、2004 年

小倉 康嗣

---

「曖昧な生きづらさ」と社会——著者の主張はこのタイトルに直裁に、そして繊細に表現されている。「曖昧な生きづらさ」。言い得て妙なる表現である。そして、この日常語に込められた著者の主張は、理論的にも方法論的にも深奥で、ラディカルである。

「曖昧な生きづらさ」という言葉が照射する地平とは何か。それは、容易に「クレイム」言説化されない、否定の力にさらされやすい問題経験の地平であり、しかしながら可能性として潜在する社会のゆらぎの芽である。そこに目を向けていくことは、どういうことを意味するのであろうか。

本書の議論はじつに濃やかで多岐にわたり、そのすべてのニュアンスをここで網羅することはとうていできない。それを切り詰めてしまう乱暴についてはご容赦いただき、まずは評者なりに読みとった本書のメッセージを 4 つの論点に焦点化して記してみたい。

《曖昧な問題経験の地平》周知のとおり、J・I・キツセラによって提唱された構築主義的な社会問題研究は、何らかの問題がある実態としての社会状態を客観的に想定する従来の社会問題研究のありようを、社会学者による社会診断を優位に置く専門職イデオロギーだとして異議申し立てした。そして、社会問題は社会学者が診断する実態ではなく、社会問題を定義する人びとの活動から構成されるとし、その産物として社会に流通する「クレイム申し立て」言説そのものを研究対象とするという視点の転換を図った。著者はその意義を十分認めながらも、それだけでは社会に流通する言説の背後にある日常的な「語れなさ」の経験を排除し、また対象とする言説の同定手続きをめぐる諸問題を切り詰めることになってしまうと批判する（第 1 章）。「何が『クレイム』なのか、またそれを同定するのは誰なのかということはそれ自体、相互行為過程で争われうる。もし『クレイム』と同定された言説を研究の対象とするならば、その争いの過程に分け入ることは難しくなり、さらにはその問いにあらかじめ答えを持ち込むという困難をも招き寄せることになる」（6 頁）と。何が「クレイム」なのかを同定する／しないという時点において、「すでに『社会問題』をめぐる攻防ははじまっている」（52 頁）のである。

そこで著者は、「『クレイム申し立て』はいかにして可能か」という問いを立て、語られた

「クレイム」言説よりも、「クレイム」と呼ばれる語りが生み出されたり否定されたりする過程としての人びとの日常的な相互行為過程に焦点を定めていく（第2章）。つまり「構築主義が『社会問題』を所与とすることをやめたように、『クレイム申し立て』を所与とせず、それがどのような過程を通じて実現するのかわからないのか、に目を向ける」（33-4頁）のである。それは、社会問題の定義活動としての「言説」そのものではなく、人びとの日常生活における曖昧な「問題経験」の過程（生きづらさ）に焦点を合わせていくことを意味する（第3章）。クレイム化された言説の周辺には、日常的な「多様で微妙な言説と振る舞いの領域」があり、そこには「多様な潜在的なリアリティの可能性」がひそんでいる（第3章、第7章）。そこに視点を定めるということは、「社会問題が構築されない」過程、「反『問題』構成の力に対する、その内側での抵抗の経験と実践に目を向ける」という新たな研究主題の発掘を意味するのである（第8章）。

《**応答する研究者の位置性**》そして、このような視点に立つとき、曖昧な「問題経験」に応答する研究者のスタンスが問われてくる。「問題経験の語り」（＝いかに曖昧であっても自分にとって「問題」である何ものかについて語ろうとする言葉）は、「周囲に生まれる言葉であり、操作的に定義されない。ある語りが『問題経験の語り』であるかどうかは、全く受け取り方…『感受性』の問題となる」（76頁）からである。「多様な潜在的なリアリティの可能性」がひそんでいる問題経験の意味層を「ある形で切り取り『クレイム』と呼ぶこと、名づけること、そして他のものをそれ以外へと周縁化することは、一つの選択であり決定である」（217頁）。そこでは、研究者自身の選択と決定が鋭く問われてくるのだ。したがって「研究することもまた、意味をめぐる闘争の外部ではありえない。『クレイム』として広く流通している語りを対象とすること、一般に流通していないがある語りを『クレイム』として取り上げること、他の語りを取り上げないこと、いずれにせよ、人びとの営みとは独立した外部に透明なものとして位置することはできない」（218-9頁）のである。

「そもそもある実践が『社会問題の構成や定義』に『寄与』しているかいないか、ということ、いったい誰のどのような判断に基づくのか」（214頁）と著者は問う。そこに「認識の食い違い」や「曖昧さ」などはないのだろうか、と。それは人びと（発言者と受け手）のあいだだけでなく、人びとと研究者（による認定）のあいだにおいても例外なく問われてくる。その意味で、研究対象とはそれ自体、「『意味をめぐる闘争』の産物、一つの政治的産物」なのである（第8章）。

《**フレームワークの歴史性**》また著者は、「クレイム申し立て」言説から曖昧な「問題経験」の過程へと視点をずらしていく根拠として、キツセらの提唱した構築主義の社会問題研究が持っている歴史性を指摘する（第2章、第3章）。キツセらの主張の根拠は、1970年代のアメリカ社会において彼が現に目撃した、ゲイの人びとをはじめとする「逸脱者」がカミングアウトする姿だった。そこにあったのは、「逸脱的」アイデンティティを積極的に掲げ、自身のあり方を肯定し、「自由」「平等」「正義」などの価値の語彙を用いて社会の「問題」を告発し、他

の人びとに道徳的要求をつきつけるような、いわば「強い言説」「強い主体」である。

だが、そういった社会／時代から、現代のわれわれは隔たった場所にいる。「現代日本に目を向ければ、アイデンティティを注意深く隠すか公然と主張するか、自己否定か肯定か、社会への同調か改変か、孤立か連帯か、という単純な二者択一的状況」の、いずれでもない状況が見出される(第4章)。たとえば著者は、現代日本におけるセクシュアル・マイノリティの人びとのアイデンティティ感覚に関する調査から、アイデンティティをあらゆる既成の言葉やカテゴリーへの微妙な違和感が意識化されていくさまを浮き彫りにし(第3章、第4章)、また、恋愛の物語を分析しながら「強い恋愛」から「緩やかな恋愛」への振幅の広がり进行を明らかにしていく(第6章)。そこで感受されるのは、ネットワーク的なつながりのなかで差異と個別性を浮かび上がらせながら、アモルファスに構成されていく「曖昧」で「弱い」自己である(第4章)。著者はそこに、「強い主体」「強い言説」から「曖昧な主体」「曖昧な過程」への射程の広がりという歴史性を読み込み(第3章)、そこに「『クレーム申し立て』カテゴリーがそれ自体むしろ問題をめぐる人びとのリアリティのスクリーニングとなってしまうような、もっと曖昧な状況」(75頁)をみるのである。

《曖昧な問題経験を社会へと媒介していく回路》では、そういった状況のなかで、人は、当該社会における「曖昧な生きづらさ」にいかに対処しうるのであるのか。それは、個人の曖昧な問題経験が、いかに社会へと媒介されうるのであるのか、という問いである(第4章)。多元化し個別化する曖昧なアイデンティティ状況を凌駕することなく「人びとに共通の問題を分節化しそれに集会的に対処する、という個人的経験の社会への媒介、そのような活動可能性の回路はいかなるものか」(116頁)。著者は、(それを「アイデンティティ」と呼ぶとすれば)「各人が部分を通じて部分的に連なる、それゆえに閉じられないネットワークであり、必要に応じてその都度立ち上げるような、よりアモルファスな、構成されるものとしての『アイデンティティ』」(117頁)にひとつの活路を見出そうとする。そして、「そこここで多様な生き方を実現しようとする人びとのアモルファスな活動と言説の増殖」が、「『社会運動』という組織化され人格化された強いかたちをとらないとしても、個人の経験を社会へ媒介しそれを次第に変容させていくのではないだろうか」(119頁)と展望する。

そんな著者のまなざしは、「人が自己の経験を歴史へと接続して生きる、それによって自己の問題経験を『社会』の『問題』として語りうるようになる、その経験の過程」としての「生きられた歴史」(第5章)、「秩序と世界の亀裂とを媒介するものとしてのわれわれ」(第7章)、そして、「切り抜ける」こととは別の可能性としての「『生きる』こと」(第7章)、を照らし出していくのである。

本書の意義を考へるときに挙げられるべき点は、まず第1に、社会問題の「言説」ではなく、なによりも個人の問題「経験」に定位しているということであろう。そのまなざしは、具体的な日常生活のなかにうごめいている潜在的な可能体としての意味層を捉えている。いまだ分節

化されない深層の意味層、意味生成の基底的な層としての前言語的な経験層を問う視点が、そこに用意されている。そしてその視点は、流行と化した感のある認識論偏重の構築主義とは一線を画しつつ、そのさきに、(構築主義を経たあとの) 実在的<sup>た</sup>地平を照らし出さんとしている。それは著者が、理論(フレームワーク)そのものを追うのではなく、その理論(フレームワーク)が生成される学問活動の「土壌」にまで目を向けることによって切り拓かれた視界であろう。

第2に、社会過程論の拡大・深化である。「問題経験」に定位することは、「クレーム申し立て」が達成される以前の「意味闘争の過程」をつぶさにみていくことを要請する。それは社会過程を、たんなる「言語ゲーム」の次元ではなく、あくまでさきにみたような「経験」の次元から——つまり、より深い次元から——明るみに出そうとする試みである。それは、諸個人の具体的な生活経験の過程からの社会生成という、か細い、しかしより基層的な回路を、繊細な感受性によって発掘しようとする試みであり、まさしく社会過程論の豊饒化に貢献している。

第3に、研究という営みが、その社会過程の一部として明確に位置づけられている。それは、たんに論理的な次元での研究者のリフレキシビティを喚起するものではない。具体的な生活経験の「土壌」における実践的レベルでの(いわば実存的な)リフレキシビティを喚起しているのである。「ある語りを受け取ることは、相互行為過程の外からの観察ではなく、他の人びとの視点から特定されたものを単に受け取るといった所作でもなく、その過程に一反応者として参加することである。人びとと研究者との論理的な区別はない」(229頁)と著者はいう。理論(フレームワーク)が生成される学問活動の「土壌」は、人びとの生活経験の「土壌」と地続きであり、研究という営みはその地続きの「土壌」において実践的に検討されていく、ということを念頭に置いた謂であろう。本書のいちばんの鍵概念が「曖昧な生きづらさ」という日常語であるのも、そのような「土壌」に定位する著者の研究態度のあらわれであると評者は受けとめた。

人びとの生活経験(それは研究者自身の生活経験をも当然含む)にあまりにも真摯で誠実な著者の姿勢に、評者はひどく共感する。だがそうであるからこそ、つぎの点について若干の所感を持った。

第1に、本書でなされている「問題経験」に定位することの意義と重要性の指摘は、きわめて説得的で十分了解できるものである。ただそのときに、そもそも「経験」をどう捉えるか、という問題は残るように思う。「言説」ではなく「経験」に定位する方法とは? どのようにしたら人びとの「経験」に沈潜していけるのか、という問いである。

たとえば著者は、当事者の「語れない」経験に接近する際、まず参照すべきは「当事者の『語れない』という事態に言及する語り」であり、それが得られないところでは、直接の分析対象としている言説の外部を参照することが必要であると述べている。「そこに何かがない、という観察を可能にするのは、対象の外部との『比較』『参照』であり、そうした手続きを可

能にするのは、広義に言って、そこにはないもの、あるべきもの、あってよいはずのもの、についての、分析者・観察者の『知識』であろうと (223-4 頁)。ここでは、その「知識」にもとづいた、当事者の「語れない」経験への研究者 (調査者) の応答、さらには研究者 (調査者) による、当事者の「語れない」経験についての語りの触発、という営みが想定されているように思う。このとき、その「知識」を得るためには、生活史研究がいうところの個人の「生 (life) の全体性」への接近が必要になってくるのではないだろうか。ここにいう「生の全体性」とは、「語りの挫折」という局面も含めて) さまざまな関係性が集積した、個人の人生という時間性における経験の流れとでもいえばよいであろうか。それは、本書にも出てきた『生きる』こと (210 頁)、「『生きられた歴史』への視点」(153 頁)にも連なるものであろう。

認識論的な議論の飽和化のなかで、学知の生産性は、もはや経験的な研究実践として、つまり「作品」として問われてくるように思う。本書でも第 3 章から第 6 章で、経験的な研究が試みられている。ただし、そこで取り扱われている経験の語りは、基本的には断片的なものである。もちろんそれはそこで論ずべき目的によって制約されたものであるのものでよいとしても、最終的に、著者がいうような「秩序の外部に開かれた自己」(206 頁、評者が表現を短縮)、「人がどの『いまここ』にも決して回収し尽くされることのない固有の存在であることの証として経験される」「過剰なものとしての自己」(203-4 頁)を捉えていくためには、やはり「生の全体性」へのアプローチが必要になってくるのではないだろうか。著者は、本書には収録されていないが参照すべきものとして挙げている論文 (草柳 2000b) で、(相互行為秩序の「変化」を考察するために)「個々の場面を超えて持続する個人の生の時間」(106 頁)に対する認識の重要性も指摘されているので、そこらへんについてもうすこしきいてみたいと思った。

第 2 に、応答する／触発する研究者の位置性の問題についてである。さきに述べたような「経験」を捉えていくためには、それを捉えようとする研究者の「知識」が問われてくる。ここにいう「知識」とは、「感受性」(76 頁)といいかえることができるだろう。当事者の経験に応答する、あるいは当事者の経験を触発する研究者の感受性である。

著者は『問題経験の語り』が、すでに述べたように積極的に規定できず、『受け取り方』『感受性』の問題であるという限りにおいて、その (現代社会におけるわれわれの経験のリアリティに接近するという) 課題には、研究対象に対する研究者のスタンスをいかに考えるかという問いも伴う (86-7 頁、括弧内は評者による補足) と述べている。評者の第 1 の所感を受けていえば、そこでは当事者の「生の全体性」へと接近する研究者自身の「生」が問われてくるといえるだろう。「なぜ、なんのために研究・調査するのか」「どうしてこの研究対象・研究テーマに関心を持ったのか」という研究者の根本的な動機を、研究対象 (当事者) と地続きな社会に実存する研究者自身の経験に照らしあわせて省察し、研究者自身の生活史的な文脈から問うていく営みも並行して必要となってくるのではなかろうか。その意味では、研究対象者だけではなく、研究者自身も自分を語らねばなるまい。みずからの経験への了解や欲望を踏まえた

問題構成を行ない、そしてそれを対象者の経験にぶつけていく。その相互行為過程それ自体を、当該研究の経験的データとしていくような方法的構えが必要になってくるのではないか。それは、研究対象の経験と研究者自身の経験との出会いのプロセスをも含めた（経験の過程としての）調査過程論を、社会過程として作品に刻み込んでいくような研究実践である。

その意味では、まさしく著者が、日常生活者である自分と社会学研究者である自分とが出会う場所で自分自身を語っている論文（草柳 2000a）が本書に収録されなかったのは、残念でしかたがない。なぜなら評者は、この論文を読みながら、本書によってつけられたいくつもの道すじがつながっていき、そこに血が通っていくのを感じたからである。それは、ひとりの「読者」として、わたし自身の経験が触発されていく「経験」でもあった。作品による読者の経験の触発。それも相互行為過程たる研究実践のひとつの局面として、社会生成の重要な回路ではないだろうか。

以上の問いは、研究実践のありよう（研究実践の所産あるいは仕掛けとしての、論文という「作品」の構成のしかた）そのものに対して再考をせまるものであろう。そして、これらの問いが再帰的に交差する地点に、個人の問題経験（曖昧な生きづらさ）を社会生成へと媒介する回路をいかにして見出していくか、という本書でも重要なものとして挙げられていた課題があるように思う。

「曖昧な生きづらさ」という言葉にこめられた著者の主張は、このように広範なことをラディカルに問いかけてくる。「曖昧な生きづらさ」という言葉は平たい日常語である。しかし、だからこそ、この言葉が照射する地平はラディカルなのである。

#### 【引用文献】

- 草柳千早, 2000a, 「『社会問題』という経験——夫婦の姓をめぐる」好井裕明・桜井厚編『フィールドワークの経験』せりか書房, 161-175.
- 草柳千早, 2000b, 「ゴフマン相互行為論の地平」『情況』8月号別冊, 93-109.

[本体価格 2310 円]

(おぐら やすつぐ 立教大学・東京情報大学非常勤講師)